蕩物語
トレモノガタリ
下
こよみハーレム

「に、兄ちゃん、早くこの前みたいに歯、磨いてくれよぉ…。」
「よし、良い子だ。じゃあ、ほら、あーん。」

「あ～…」
「じゃあまず右～…」
（シャコシャコ）
「ん、ん、んん」
はあああ、これこれ。
兄ちゃんに歯を磨いてもらうと
すげえ幸せな気持ちに
なるう～…

「はい左～…」
（シャコシャコシャコ）
「ん、んん、んぁ」
ぽ～
ああ、ダメだ、
気持ちい～…
頭ぼーっとする…

「舌にも雑菌が
沢山付着してるからな
よく磨かないと」
（シャコシャコシャコシャコ）
「あぁ、んぁ、
はぁ、はぁぁ…」
ぽ～
はぁ
はぁ
ドキドキ
ああ～…ヤバイ、
身体…熱い、
おまたのあたりが
ジーンとしてきた…

「はぁ、はぁ、はぁに、兄ひゃん、お、おしまいかぁ？」
「…か、火憐ちゃん…」
ぽ～
はぁ
はぁ
ドキドキ
ビンビン
ビンビン
兄ちゃんどうしたんだろ？そんなに息を荒げて…

「こ、今度は、
僕の“歯ブラシ”を
使おうと思うんだけど
ど、どうだ？」
「あ…」
ぽ～
はぁ
はぁ
ドキドキ
兄ちゃんのおち○ちん…

すごい臭い…、
なんだかすごくえっちな
臭いだぁ…。
ぽ～
はぁ
はぁ
ペロペロ
ドキドキ

「はむっ、んくっ、んくっ」
口の中いっぱいに
えっちな味が広がってく…
はむ
ドキドキ

「んくっ、んっ、んっ、んっく」
おいしい、
兄ちゃんのお●んちん
おいしいよぉ…
ちゅぱ
ちゅる
ちゅる
ドキドキ

「んっ、んっ、んっ、んっっ！」
な、何!?
急にスピード上げて、
く、苦しい…
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
ドキ
ドキ

「出るっ!!!」
ドクン
ビュル ビュル
ドキドキ
「んーーーーーっ!!!」

「んふーっ、んふーっ…」
う、何だコレ、青臭い…
「火憐ちゃん、
そのまま、ゴックンして」
え？コレ飲むの？…
ごきゅ
ごきゅ

「はぁ、はぁ、ごめん兄ひゃん、
飲みきんない…」
喉に絡み付く…
ぽ～
はぁ
はぁ
ドキドキ

はぁ
はぁ
トロ〜
「に、兄ちゃん、
さっきからおまたがジンジンして
すごく切ないんだ。
どうしちゃったんだ？あたし。」

「どれどれ？」
「う～ん…う～ん……、よし。」
触って…
兄ちゃんあたしのアソコに触ってくれぇ…
はぁ
はぁ
ドキドキ
トロ～

「え？に、兄ちゃん？
あたしの歯ブラシを
どうするんだ？」
ビク
クチュ
クチュ

「ま、まさか!?」
ドキドキ
ピト…

「んあああああああ!!!!」
ビク
プシッ
ズブッ

「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!
に、兄ちゃん何をおぉぉ…」
ジュッ
ジュッ

何コレ？変な感じ…、
う○ちが出たり入ったり
してる感じに似てるけど…
もっと別の感覚も混じってるっ
ジュボ
ジュボ

「あぁっ、あっ、あっ!!」
中をブラシで擦られてるのに、
アソコの方がジンジンしてきたぁ!
ジュッ
ジュッ

「あああああああああああああっ」
ヤバイ、なんか変だ、アソコのジンジンが強くなってきた！
何かがこみ上げて…
ビク
ビク
ビク
ジュッグ
ジュッグ
ジュッグ
ジュッグ

「イっっぎぃんーーーーーっっ!!!」

ビク

ビクっ

ビク

プシャァァァ

ビクッ

ジュッグ
ジュッグ

ジュッグ
ジュッグ

「はぁ、はぁ、兄ちゃん…すごい…」
「火憐ちゃん…、僕…、僕…」
はぁ
はぁ
ヒクヒク
トロ

「え？兄ちゃん？ちょっと待って、挿入れちゃうの？」
「ごめん、火憐ちゃん。僕もう我慢できないんだ！」
兄妹でそれはヤバいんじゃないの？
はぁ
はぁ
ドキドキ
ヒクヒク
ピト…

てか、
ビクビクってなったせいなのか
アソコが敏感になっちゃってる…
今、挿入れられたら、
どうなっちゃうんだろ…
はぁ
はぁ
ドキドキ
ヒクヒク
ピト

「いいいいっっっ!!!」
ビク
プシッ
ズブッ

「あぁぁっ、兄ちゃんっ、兄ちゃんっっ！」
「うぁぁ、火憐ちゃんの膣内、やべえっ！ずげえ気持ちいい！」
ビク
ビク
ビク
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン

ああぁ、ダメぇっ！
そんなに動かないでっ！
身体のビクビクが
止まんないよぉっ！
ビク
ビク
ビク
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン

「火憐ちゃん！火憐ちゃん！火憐ちゃん！」
「兄ちゃん！兄ちゃん！兄ちゃん！」
ダメェ！飛んじゃうっ！飛んじゃうよぉっ！
ビク
ビク
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
ジュッポ
ジュッポ
ジュッポ
ジュッポ

「イクっっ!!!」
「いぎいいいいうううっ!!!」
ビク
ビク
ビクッ
ビクッ
プシャァァァ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「はぁ、はぁ、兄ひゃん、わらひい、もう、らめぇ…」
ビク
はぁ
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ヒク ヒク
ドク…

ちょっと、お兄ちゃん、
妹にこんな格好させて
どういうつもり！」
「いや、先日ちょっとあったんで、
身体検査だよ。」

まさか、
上半身が吹っ飛ばされたとは
言えないよなあ…
「別に私なんともないよっ！」
「いや、念には念をだな！」

『どれ』
「わわわわ、
なんで馬乗りになる必要があるのよ！」
「いや、上半身を調べたいから、
この方が良いんだよ。」

「それじゃ、失礼して。」
「ちょ、ちょっと
なんでおっぱい触るのよっ!?」
「いや、だから念には念をだなっ！」
ムニ
ムニ

「……」
「……」
ムニュ
ムニュ
ムニュ
ムニュ

「ちょっと、
お兄ちゃん妹のおっぱい触りすぎ…」
「ん、ああ…なんか、つい、な？」
やだ…、そんなに揉まれたら、
変な気分になってきちゃうじゃない…。
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ

「な…、なんで舐めるの？」
「いや、なんとなく…、嫌？」
「……別に。」
なんだろ…すごく心地良い感じ…。
お兄ちゃんのくせに…
ペロペロ

「ん、んふ…、んっ」
あれ？あれ？なんか変だぞ？
月火ちゃん滅茶苦茶可愛いぞ？
やだ、そんなに先っちょばかり
責められたら…
ペロペロ

「はぁ、はぁ」
勃起っちゃった…
「つ、月火ちゃん！」
はぁ
はぁ
ピンコ
トロ～

『こ、今度は、
僕のこれ、舐めてくれないか？』
「あ…」
お兄ちゃんのおち〇ちん…
すごい臭い…エッチな臭い…
はぁ
はぁ

ぽ～
ペロペロ
ちょっとしょっぱい…
頭ぼーっとなる変な味…
「ああ、月火ちゃんいいよ、
そのまま咥えて」

おっきい、
口の中お兄ちゃんの
おち〇ちんでいっぱい
ぽ～
はむ

「んん、ふ、んっ、んん」
「月火ちゃんの口の中、
すごくいいよ」
お兄ちゃん気持ちよさそう、
なんか嬉しいな
ぽ～
ちゅぱ
ちゅぱ
キュン
キュン

「やべ、月火ちゃんっ!!!」
「んんんんっ!?」
や、ダメェ！乳首キュってしちゃ！
キュッ
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
キュッ
キュン
キュン
キュン
キュン

『出るぅぅ!!!』
「んーーーーーっ!!!」
ドクン
ビク
ドクン
プシッ

ぽ～
はぁ
はぁ
ゲホ
ゲホ
「はぁ、はぁ」
なに今の…
乳首キュってされて、
そしたら身体がビクンって…
「月火ちゃん、すごく良かったよ」

「お、兄ちゃん、
ね？も、いいでしょ？」
「はぁ、はぁ、
いや、
まだ下半身のチェックが
終わってないよ」
はぁ
はぁ
ヒク ヒク

「あれ？なんだこれ？」
「やっ!?」
ビク
キュッ

『これ？クリ○リス…だよなぁ？
普通より少し大きくないか？」
「あっ、ああっ、
お兄ちゃん、ヤ、ダメそこっ!!」
なにコレなにコレ!?
刺激が強すぎっ!!
ビク
キュッ

「お願いっ、やめて！
さっきのビクンがまた来ちゃいそうだよ！」
「え？また？」
さっき乳首だけでイっちゃったのか!?
ヤベェ、興奮してきたっ!!
くり
くり

「よし、月火ちゃん、
またそのビクンしようねっ！
こっちもいじったらすぐだから」
「えっ!?なになに!?
やだぁぁぁぁぁぁ!!!」
来るっ！来る！来ちゃうよぉっ!!!
キュン キュン
クチュ クチュ
クチュ クチュ
くりくり

「いいいいんんーーーっ!!!」

ビクン

プシャアアアア

ビク

ビク

ビク

「はぁ、はぁ、
あ…、あぁ…、あ…」
もう、ダメェ…
はぁ
ビク
はぁ
ビク
ヒク ヒク
ビク

「よし月火ちゃん、
今度は膣内を調べるよ？
コレが最終チェックだ！」
「ほう、ひやらよぉ…」
これ以上したら、壊れちゃうよぉ…
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ピト…
クチュ
クチュ

「んひいいーっ!!?」
ビク
ビク
ビク
ズブッ♥

「あ、あ、あ、あ、」
『うはぁ、
膣内もサイコーだよ！異常なしっ！」
さっきから、
身体のビクビクが止まらないっ
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
ビク
ビク
ビク

「ああっ、ああっ、
あ、ああ、あ」
や、お兄ちゃん激しいっ、
また、大きいビクンが来ちゃうっ!!
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
ビク
ビク
ビク

「おおお、月火ちゃん、
イクぞおおおお！」
「わ、わらひもおおおお…」
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
ビク
ビク
ビク
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ
ジュヴ

「イクっっ!!!」
「んほおおおおおおおおおっ!!!」
ドクン
プシャァァァァ
プシッ
プシッ
ビクン
ビク
ビクン
ビク

「あ…、あ…」
「…ふう、月火ちゃんの身体に何も異常がなくて良かったよ！」
はぁ
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
ヒク ヒク
ドク…

「ほら、どうしたの？
鬼のお兄ちゃん？来なよ。
こんな大胆なポーズをして
誘っているのに、
鬼のお兄ちゃんは何もしない
つもりなのかな？

それとも、
何も出来ない腑抜けなのかな？」
「ふむ、そうまで言われちゃあ
仕方がない。僕も男だ。
[redacted]の一人くらい満足させてあげよう。」

「お客さぁん、ムチムチだねぇ、良いモモしてるねぇ～」
「鬼のお兄ちゃん。それはマッサージのつもりなのかな？悪いけど全然気持ちよくないよ。」
サワサワ

「ここはどうかなぁ？」
「テクニックの欠片もないね、
局部をいじれば、
女はみんな悦ぶと思ったら
大きな間違いだよ」
ひどい言われようだ。
キュッ
サワ サワ
サワ サワ

「でも、ほらぁ、こうしたらどうかな？」
「はぁ、まったくもって気持ちよくない。鬼のお兄ちゃんは何かリアリティのないエッチな本の読みすぎなのかい？」
むむ、少し自尊心が…
ムニ
ムニ

「でも、アレだなぁ、
斧乃木ちゃんのここは
モリっとしてて。
今までの娘と全然違うなぁ、
プニプニしてて可愛いよ。」
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ

「いやはやココまでとは。
行為の最中に他の娘の話なんて論外だよ。
鬼のお兄ちゃんはもう少し女心を
勉強した方が良い。」
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ

「まぁ、僕は
鬼のお兄ちゃんのコトなんか
なんとも思っては
いないんだけどね。」
う～ん、なんだろう、自分から誘っておいて。
この[redacted]ツンデレなのか？
ムニ
ムニ
ムニ
ムニ

「あれ？」
「……。」
なんか染み出来てね？
濡れてね？
じわ…

「えっと、直接触りたいんだけど、
タイツどうする？
おっぱいも見たいなぁ。」
「タイツの替えはいくらでもあるから、
破いてくれて構わないよ。
ワンピは自分で脱ぐよ。」
じわ…

「さ、これで良いかな？
次はどうするの？」
「それじゃ…」

「綺麗なピンク色だね～、
小陰唇もこんなに小さい」
やっぱり少し濡れてるじゃん。
くぱぁ

『斧乃木ちゃんのココ、おいしいよ。」
「……。」
ペロペロ
ジュルジュル

「クリ○リスも皮被ってて可愛いなぁ。」
「……。」
あれあれ？どうしたのかな？
全然しゃべらなくなっちゃったぞ？
ペロペロ
ペロペロ
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル

「ンフー、ンフー、」
あれ？顔が真っ赤だ、
乳首もクリもビンビンだし、
息も少し上がってる。
やべぇ、興奮してきた！
ンフー
ンフー
ピュコ
トロ～

「よし、じゃあ今度は膣内いじるね。」
「す、好きにし、なよ。」
ンァー
ンァー

「ん、んふ…」
「どう？気持ちいい？」
「ぜ、全然、
き、持ちよくない、よ。」
の、わりには声震えてる、よな？
ンフー
ンフー
クチュ
クチュ

「ほら、コレならどうかな？」
「ぜ、んぜ…んふ、ん、」
効いてる効いてる。
ンフー
ンフー
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ

「ふっ、んっ、ふっ、んんっ、んっ」
おお、締まってきた！
イキそうなのかな？
ンァー
ンァー
ンァー
ンァー
ジュゲ
ジュゲ
ジュゲ
ジュゲ

「んんっっっ!!!」
ビクン
ビク
ビク
ビク
プリュュュュ
ビク

「すごい潮だったね。気持ち良かった？」
「し、お吹かせた、程、度で、いい気に、ならないで、よ、ね。僕、はイってないし、感じ、て、ない。」
強がっちゃって、可愛いなぁもう。
ぽ～
ンフー
ンフー
ヒク ヒク
トロ～

「よいしょ。」
「ん？な、に？」
ヒク ヒク
トロ～
シュ～
ぷ～
シュ～

「じゃあ、挿入れるよ。」
「……。」
ピト…
クチュ
クチュ
シァー
ぷ～
シァー

「んーーっ!!!」
ズブッ

「んっ、いっ、んんっ、ん」

「ああ、
やっぱり斧乃木ちゃん、
すげぇ締め付けだよ。
なんか、膣内ビクビクし
てて気持ちいいなぁ。」

ビク

パチュン

パチュン

パチュン

パチュン

ビク

ビク

ビク

「べ、別に、さっき、
イった、ばかり、とか、
そういう、のじゃ、
ないか、ら。
イって、ないか、ら。」
素直じゃないなぁ、
逆に興奮するんだけどね！
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
ビク
ビク
ビク
ビク

「あああぁぁぁぁぁぁっ!!!」

「うあ、急にまた締め付けてっ！またイキそうなんだね!!?僕もイクよおっ!!!」

ジュボ ジュボ ビク

パン パン パン パン パン パン

ビク ビク

「イクっっ!!!」

ビク

ドクン

プシャァァァァ

ビク

「んおおおおおおっっ!!!」

ビクン

ビク

ビクン

ビク

「…ふぅ」
「あ、ああ、あ…」
「鬼の、お兄、ちゃんは、ダメだ、なあ…こんなに、簡単、に浮気し、て。」
『へ？』
ドクン…
ビク
ビク
ビク
ビク
はぁ
はぁ

「信頼、関係、
とか、そういうのって、
こうもたやすく、
壊れるもの、
だってこと、とを、
身体を、はって教え、て
あげた、かったの、さ。」
ドクン…
ビクビク
ビク
ビク
ビク
はぁ
はぁ

「そんなこといいから、
ピースしてピース。
ほら横ピース』
「ぴ、ぴーすぅ。」

ドゥ…
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
はぁ
はぁ

「さて、お前様よ、儂に何か言っておくことはないかの？」
「え？えーと…な、何のことかな？」
「ほほう、シラを切るつもりか、
お主がこれまでに数多の女子たちと何をしようが儂は目を瞑ってきたが」
「数多って…（上）は無関係だぞ！
前書き（はじめに…）でも製作者が言ってた！
そう、コレはパラレルワールドなんだ！」
「ふむ、一万歩譲ってそうだとして、生涯のパートナーである儂を
さしおいて、あんなよそ者の式神[redacted]と行為に及んだコトについては、
少々黙ってはおれんな。」
「いや、だからアレは不可抗力と言うか、
ハメられたというか、ハメたと言うか。」
「儂よりあんな[redacted]の方が良いのか、そーかそーか。」

「いや、忍ちゃんの方が良い！忍ちゃんがサイコー！」
「ん？すまんがよく聞き取れなかった、もういっぺん言ってもらえるか？」
「忍ちゃんがサイコー！」
「ああ、すまん、もういっぺんかの？」
「忍ちゃんがサイコー！忍ちゃんが可愛い！忍ちゃんがステキ！」
「儂とやりたい？」
「やりたい！やりたい！
むしろ忍ちゃん以外とはやりたくないくらいです！」
「ふむ、そこまで言われてしまうと、断りきれんなぁ。
来る者拒まず！それが儂という女じゃ。」
「しかしアレじゃな、蝸牛[illegible]といい、式神[illegible]といい、儂といい、
[illegible]体系に興奮するとはお前様は真性の変態か？」
「はい、僕は変態です！」

『ふむ、では変態にふさわしく、まずは儂のこの足でしてやろう。』
『ホレホレ、どうじゃ？[redacted]の足は？柔らかくてプニプニじゃろう』
『うはぁ！』
柔らかい足の裏でされるのがこんなに気持ちいいとは…
ぐりぐり
ぐりぐり

「おう？なんしやお前様、もう我慢汁が滲んでおるぞ、そんなに儂の足が良いか、この変態め。」
「はい、忍ちゃんの足サイコーです！」
ぐりぐり
ぐりぐり

「ん、んっ？」
む、まずいの、ピアリングのせいで、
こっちにも感覚が伝わってくるわい。
ンァー
ンァー
ピンコ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「んっ、んっ、んふ、んんっ、ん…」
あれ？忍の様子が変だな、
ああそうか！それなら…
ンァー
ンァー
ピンコ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「あああ、こ、こら、今ソコを摘むでないいっ!!!」
この感覚、あるじ様の絶頂が近いのかっ、
このままでは“両方”達してしまうっ!!!
「おおお、もう、出るぞっ!!!」
キュー
キュン
キュッ
ビクン
ビクン
ビクン
ビクン

『出るっ!!!』
『イっ、んんーーーーっ!!!』
ビクンビクン
ビュルビュル
ビク
ビク

『はぁ、はぁ、お、お前様、知っててわざとしおったな…。』
「いや、忍にも気持ちよくなってもらいたかったからな。」
『ま、まぁ、別に良いのじゃがな。』
はぁ
はぁ
ドク…
ぐぷぐぷ

「よし、この体液を取り込めば…」
「ん？」
はぁ
はぁ
ドク…
ぐぷぐぷ

「ほれ、この通りじゃ。」
「おおお!?
どういうことだよ!?」
「血にせよ、肉にせよ、体液にせよ、
お主の一部分を取り込めば
そのまま儂の力になる。
まあ、あの程度では
外見を変えるコトしか出来んがの。」

「ほれ、ほれ、
何をボケっとしておる、好きにして良いのだぞ？」
「じゃあ、まず…」

「んっ？なんじゃ？」
「ほら、前に言ってた、より強い服従の証だよ。
コレがやりたかった！」
「お前様らしいの。」
ムニ

「ん…」
『うはぁ、すげぇ手におさまらねぇよ。』
柔らけぇ、それでいて弾力のある…。
よく見ると乳首陥没してるな。
ぷにぷにぷにぷに

「ん…、んふ」
ふふ、赤ん坊のように必死に舐めおって、
可愛いものよ。
ペロペロ
ペロ ペロ

「あ…、はぁ」
うむ、なかなか良いぞ。
ペロペロ
ムニムニ

「んんっ！ん、ん…」
あ、こら、そんなにほじくったら…
ンァー
ンァー
ムリ
ムリ
ムリ
ムリ

『はぁ、はぁ、あ…、あ』
『勃起った勃起った
乳首が勃起った！』
『儂の乳首はクラクラか！』
ぽ～
はぁ
はぁ
ピンコ

「忍、今度は僕の、良いか？」
「う、うむ。」
ぽ～
はぁ
はぁ

我があるじ様のイチモツはものすごい臭いじゃのう…
これでは、人間の女子がコロッと堕ちるのも
無理ないの。
ある種のテンプレーション…
これも“後遺症”かの。
ぽ～
ぺロぺロ
ぺロぺロ

『んっ、んん、んふ、ん…』
『うはあ、忍、すげえ、舌が絡みつくっ！』
ぷ～
はむ
ちゅぷ
ちゅぷ

ペアリングのせいで、
自分のモノを舐めているような感覚じゃ…。
なんというか、俗に言うセルフフェラというのは
こういう感覚なのか。
ぷ～
はむ
ちゅぷ
ちゅぷ

「くっ、忍っ！」
「んんっ!んっ、んっ」
ぷ～
ぐにゅ
ぐにゅ
ぐりゅ
ぐりゅ
ぐにゅ
ぐにゅ

本当におっぱいが好きじゃのう、
我があるじ様は。
しかし、セルフフェラに加え、
セルフパイズリとは滅多に
体験できることではないの。
すごい感覚じゃ。
ぷ～
ぐりぐり
ぐりぐり
ぬぬ
ぬぬ
ぬぬ
ぬぬ

「んっ、んっ、んっ、んっ！」
この感覚…もう達するのか…、儂も…
「忍っ！、忍っ！」
ジュッグ
ジュッグ
グチュル
グチュル
ジュッグ
ジュッグ

「出るっ!!!」
「んんーーーーっ!!!」
ビク
ビクン
ドクン
ビク
ビクン
ビクン

「はぁ、はぁ、
さっき出したばかりだというのに
すごい量じゃの、
今度ばかりは飲みきれんぞ…。」
ぽ～
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ドロ…
ゴクン
ゴクン

「はぁ、はぁ、
す、少し休憩せんか？
ご存知の通り、ペアリングのせいで
儂はさっきから
あっちでもこっちでも
達しっぱなしじゃ。」
ぽ～
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク

『お、おい、聞いておるのか？我があるじ様よ？」
「ダメだよ忍、忍のこんな姿見てたら我慢出来るわけないよ。」
『ちょ、ま…』
ぽ～
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ビト…

「んひいいいっ!!!」
ビク
ビク
ビク
ビク
ズブッ

「はぁ…、このまま動かずに、
す、少し休、もう…」
ダメじゃ、
さっき達したばかりじゃから、
局部が敏感になっておる…。
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ヒク ヒク

パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
パチュン
ビク
ビク
ビク
ビク
「ああっ、ああああっ、あ、
あるじ様よ、
やめ、やめぬかあああっ」
「そういう忍の反応も
めちゃくちゃ可愛いくて！
俄然腰に力が入るっ！」
ダメじゃダメじゃ！
すぐにでも達してしまうぞっ！

「あああああああああああっ!!!」
「忍っ！忍っ！忍っ！」
来る！来る！来るっ！
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
パン
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク

パン
ビクン
パン
パン
ビク
パン
ビク
パン
ビク
パン
ビクン
「イっ、んぐーーーーっ!!!」
「忍っ！忍っ！忍っ！忍っ！」
ビク
ビク

『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ…』
『また、イっちゃったんだね、忍。』
ぽ～
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ヒク ヒク

「って、ええ!?お前身体がっ!?」
「はぁ、はぁ、達しすぎれ、もろって、しま、ったわい。」
「おま、身体が縮んだせいで、すげえ締め付けだっ!!!」
ぽ〜
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ヒク ヒク
ギチ
ギチ

「おおおおおっ!!!」
『も、やめ、あぁっあぁあっ!!!』
「ごめん忍っ！
僕、まだイってないからっ！」
「あ、あ、あぁ、あぁあっ!!!」
「忍ーーーっ!!!」
パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン
ビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクビク

「イクっ!!!」
「いいいいいっ!!!」
ビクン
ビク
ビクン
ビク
ドクン
ビク
ビク
ビク
ビク

「あ、ああ、あ」
なるほど…、
我があるじ様の性欲は
ものすごいものじゃ…。
コレは独占していたら
身が持たんの。
ぽ～
はぁ
はぁ
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
ビク
ぷぷ
ぷぷ